慰霊

題字揮毫・故　瀬島龍三氏

第43号

公益財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073　千代田区九段北3-1-1
靖國神社遊就館内・地階

電　話：03（6380）8943
ＦＡＸ　03（6380）8952
http://ireikyou.com
振替口座　00140-6-334930

編集・発行人　圓藤春喜
印刷所　ﾖｼﾀﾞ印刷株式会社

目　次

大東亜戦争の戦争目的　1
パレンバン空輸挺身作戦と慰霊　その３　5
占守島の戦い　その２　9
ユダヤ人難民を救い、ソ連の北海道北部占領を阻止した将軍　樋口季一郎　12
事務局からの報告等　15

大東亜戦争の戦争目的

はじめに

大東亜戦争は、開戦のご詔勅にあるとおり、「自存自衛」のためやむなく、日本が米英蘭に対し戦いを挑んだものである。

しかし国力の差はいかんともしがたく、日本は一敗地にまみれたが、この戦争が契機となってアジアの諸国は挙って独立を果たし、その後の各国国民の努力と相まって今日、目覚ましい発展を遂げている。

米国の社会科学者・ドラッカー曰く「結局のところ、最後に戦争に勝利したのは日本だった。日本はアジアから西洋を追い出し、西洋の植民地支配の権威を失墜させた。日本が戦争目的とした大東亜新秩序の建設は、見事に達成された」と。

しかし、このドラッカーの評言に首を傾げる向きがある。日本が戦争を開始したのは、米英など欧米諸国にいじめ抜かれ、ＡＢＣＤ包囲陣などで糧道を絶たれ、「自存自衛」、言い換えれば自暴自棄で勝つ見込みもない戦争に飛び込んだものじゃないか。

「アジアの解放」とか「大東亜共栄圏の建設」などというキレイゴトの戦争目的は、戦争緒戦の予想外の勝ち戦に気を良くした日本政府が後から考え出した後智恵で、戦争を始めた当初は考えもしていなかったはずだ、というものである。果たしてそうだろうか。

大東戦争全戦没者合同慰霊祭のご案内

当協議会は、当協議会参加団体と共に、平成30年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を左記のとおり執り行います。

記

一　時期　平成30年7月7日（土）（参集殿集合11時40分までに）
二　場所　靖國神社
三　次第
　①　式典・昇殿参拝　12時～　拝殿・御本殿
　②　直会　13時30分～　靖國会館
四　参加費
　①　式典・昇殿参拝（玉串料）　２０００円
　②　直会　５０００円

皆様お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますようお願い申し上げます。
会員の皆様には、本誌同封の払込取扱票による参加費納入をもって、ご参加申込に替えさせていただきます。
ご参加申込は、平成30年６月25日までにお願い致します。
会員以外の方は、当協議会事務局までお問い合わせ下さい。

〒１０２―００７３
千代田区九段北３―１―１　靖國神社遊就館内・地階
（公財）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局
電話　０３―６３８０―８９４３
ＦＡＸ　０３―６３８０―８９５２
Ｅメール　bck05197@nifty.com

帝国国策遂行要領

昭和16年12月８日朝、昭和天皇が発布された開戦のご詔勅には「帝国は今や自存自衛のため決然と立ち上がり、一切の障碍を破砕するほかはない。・・・速やかに禍根を刈り除いて東亜永遠の平和を確立し、もって帝国の光栄を保全することを期する」（口語訳）と述べられているが、ここで述べられた「自存自衛」の文言のみが一人歩きし、「東亜永遠の平和の確立」なる文言に気付かない人が、案外多かったのかも知れない。

５００年にわたり西欧列強の植民地支配に簒奪され続けてきたアジアにおいて唯一、生き残って孤高の抵抗を続けてきた日本という国に、様々な形で西欧列強からの締め付けが行われ、最終的には禁輸に次ぐ禁輸、際限ない経済圧迫を受け、石油も鉄も止められ、生き残るためにやむなく立ち上がった戦争、「自存自衛」のための戦争、これが大東亜戦争であることは、紛れもない事実である。

しかしながら、「自存自衛」は戦争開始の動機にはなるが、他国の領土領域にまで押しかけて行く戦争行為の目的としては大義名分が薄弱ではないか、ではこの戦争の目的・大義を何に求めるか、ということが、戦争突入の決心が目前に迫った昭和16年９月から11月にかけての大本営政府連絡会議、閣議等の席上において繰り返し議論されたと聞く。その結論として、昭和16年11月５日決定の「帝国国策遂行要領」において、今後やむなく戦争に突入する際の本戦争の目的・大義名分が、次の如く決定された。即ち、「帝国は、現下の危局を打開して自存自衛を全うし大東亜の新秩序を建設するため、対米英蘭戦争を決意する」と。

そして戦争が開始された直後の12月12日の閣議において「この戦争の正式名称を『大東亜戦争』と呼称する。大東亜戦争と称するのは、大東亜新秩序建設を目的とする戦争なることを意味する」ことが決定され、内外に告知されたものである。

ラジオ放送「国民に訴う」

また、12月８日夕、宣戦の詔勅の発表に次いで、今次戦争の目的・意義について国民に理解を求めるためのラジオ放送が、「宣戦の布告にあたり国民に訴う」との表題で、政府情報局次長によって行われているので、戦争目的に関わる関連部分を抜粋して紹介する（口語訳）。

「この戦いの意義は、これを消極的の面より言うならば、真に止むを得ざる自衛の戦争であります。・・・

しかしながら、これはまた積極的の面より言うならば、帝国の使命を完遂し、建国の理想を実現して祖宗の威霊に応える聖戦であります。

これはまた、アジア十億の民の信頼に応える道でもあるのであります。アジアに国を成すすべての国家、すべての民族をして、各々その所を得しめ、日本は己れを虚しくしてこれを率いつつ、アジア恒久の平和を築き、進んで世界の平和を確保せんとするのであります。・・・

我らは戦って戦って戦い抜くのであります。南に、東に、北に、西に躍進し突進して、アジアの歴史を創るのであります。アジアを、白人の手からアジア人自らの手に奪い返すのであります。アジア人のアジアを創りあげるのであります。そして、アジアに国を成すすべての国々と、すべての民族とをして、各々その所を得せしむるのであります。」

帝国政府声明

更に、戦争開始の翌日の12月９日、宣戦を内外に宣言する「帝国政府声明」が発表され、日本が戦争に踏み切らざるを得なかった理由と、日本がこの戦争を通じて東亜の新秩序建設に邁進する決意が表明され、関係するアジア諸国の人々に理解を求める訴えがなされているので、関連する部分を抜粋し、次に紹介する（口語訳）。

「帝国が日満華三国の提携により共栄の実を挙げ、進んで東亜興隆の基礎を築かんとの方針は、もとより変わる所なく、また帝国と志を同じくする独伊両国と盟約して、世界平和の基調を画し、新秩序の建設に邁進せんとの決意は、益々確固たるものがある。

そのために今次、帝国は、南方諸地域に対して、やむを得ず新たに行動を起こすが、これは何らその住民に対し敵意を有するものではない。ただ米英の暴政を排除して、東亜を明朗本然の姿に戻し、相携えて共栄の楽を分かち合おうと祈念する以外の何ものでもない。

帝国は、これら住民が我々の真意を了解し、帝国と共に、東亜の新天地に新たなる発足を期してくれることを信じて疑わないものである。」

このように日本は、戦争開始の当初から、この戦争の目的として「東亜新

秩序の建設」を明々白々に掲げ、アジア諸地域を植民地支配する米英蘭に対し戦いを挑んだことは疑う余地のない事実である。

アジアの解放と大東亜会議

戦争を開始して半年間、日本は破竹の勢いでアジア各地に進撃し、香港、マレー、シンガポール、フィリピン、仏印（現在のベトナム、カンボジア、ラオス）、蘭印（現在のインドネシア）、ビルマ（現在のミャンマー）を占領し、アジア諸国を数百年に及ぶ白人勢力の植民地支配から解放した。米英蘭などの欧米勢力を駆逐した日本は、それまでの欧米人による植民地支配とは全く違った形で、新生アジアの建設に努めた。現地人による行政・教育・経済の作興を支援し、現地人をもってする軍隊・教育・医療衛生・産業の育成に努めた。

その結果、昭和18年には、ビルマ（現在のミャンマー）、次いでフィリピンなどが相次いで独立を果たし、インドが「自由インド仮政府」をシンガポールにおいて旗揚げした。

そして昭和18年11月、新生アジア各国の代表を招いて「大東亜会議」が東京において開催された。

参集したのは、フィリピンのラウレル大統領、ビルマのバー・モウ首相、満州国の張景恵総理、中華民国の汪兆銘代表、タイのワンワイ・タヤコーン殿下、自由インド仮政府のチャンドラ・ボース首相、日本からは東條英機首相である。

これこそ地球の歴史が始まって以来初めての、有色人種の各国代表が一堂に会したサミットであり、欧米諸国による植民地体制からのアジアの解放、人種差別撤廃、諸国・諸民族の自主独立と歴史伝統の相互尊重を謳った真に歴史的会議であり、人類の長い歴史に新しい時代を切り開いたものである。

この「大東亜会議」において満場一致で採択された「大東亜共同宣言」の要旨（口語訳）は、次のとおりである。

「世界各国が相寄り相助けて万邦共栄の楽を共にするのが、世界平和確立の根本要義である。しかしながら、米英は自国の繁栄のため、他の国家や民族を抑圧し、特に大東亜に対しては飽くなき侵略や搾取を行い、大東亜の安定と平和を根底から覆そうとしている。これが大東亜戦争の原因である。

大東亜各国は相提携して、大東亜を米英の桎梏から解放して自存自衛を全うし、左記の綱領に基づき大東亜を建設し、世界平和の確立に寄与しようとするものである。

1　大東亜各国は、大東亜の安定を確保し、道義に基づく共存共栄の秩序を建設する。

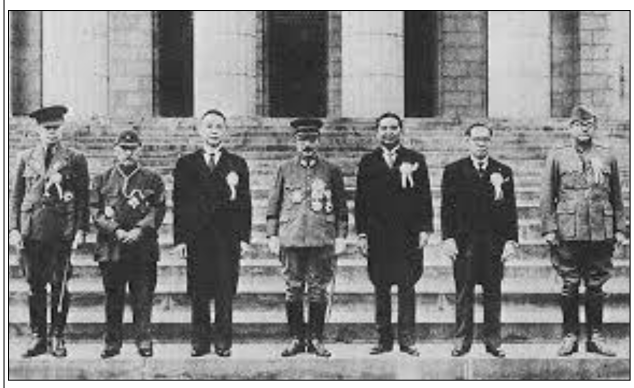
2　大東亜各国は、相互に自主独立を尊重し、大東亜の親和を確立する。

3　大東亜各国は、相互にその伝統を尊重し、大東亜の文化を昂揚する。

4　大東亜各国は、互恵のもと、経済発展を図り、大東亜の繁栄を増進する。

5　大東亜各国は、人種差別を撤廃し文化と資源を交流して、世界の発展に貢献する。」

大東亜会議



大東亜会議参加首脳（左からバー・モウ、張景恵、王兆銘、東条英機、ワンワイタヤコーン、ホセ・ラウレル、チャンドラ・ボース）

第二次大東亜戦争とアジア諸国の独立

しかしながら、真珠湾攻撃成功以降、破竹の勝利を続けた日本軍も、昭和17年６月のミッドウェイ海戦での破綻以降は戦勢逆転し、国力の差も如何ともなし難く、第一線将兵の勇戦敢闘も虚しく、じりじりと敗退の道を辿る。

そして昭和20年８月15日、日本はポツダム宣言を受諾して終戦。３年７ヵ月に及んだ日本と連合国との戦いは、昭和20年８月15日の日本のポツダム宣言受諾をもって終了した。

しかし、この日本の敗戦は、あくまで大東亜戦争の第一幕の終了に過ぎなかった。第二次大東亜戦争ともいうべき本当のアジア諸国独立の戦いは、この昭和20年８月15日から本格的に始まったのである。

日本というアジアの有色人種の旗頭が米英蘭などの白色人種勢力に対して戦いを挑んだ大東亜戦争、とりわけ当初の７ヵ月間の米英蘭軍相手の連戦連勝は、長い間、西欧勢力の力に畏怖し植民地支配に忍従してきたアジアの諸民族に感動と自信を与えた。「白人依存から脱却し、自分達の祖国を自分達の手で作ろう」との意識を目覚めさせた。

しかも、アジア各国を占領した日本軍は、軍政をしくに当たって積極的に現地人官吏の登用と育成に努めた。将来の独立のための行政、教育、経済面での援助と指導に力を入れた。

特に、将来の各国の指導者の育成を目的とした「南方特別留学制度」を設け、東南アジア各国から選抜した有為の青年層を日本に留学させ、高等教育を受けさせたが、この約２００名の南方特別留学生達が、後に、独立したアジア各国の政官界や教育界のリーダーとして活躍するに至ったことは特筆に値する。

また日本軍は開戦の当初から、将来の各国の独立に備えた現地国民軍の育成を重視して、青年教育の一環としての愛国教育と軍事訓練を積極的に進めた。

インド国民軍、ビルマ独立義勇軍、ジャワ防衛義勇軍、スマトラ義勇軍、マレー義勇軍、ボルネオ義勇隊、インドネシア義勇隊、フィリピンのマカピリなどがその例であるが、これらの日本軍によって軍事訓練を受け、武器を供与された国民軍が中核となって、昭和20年以降、東南アジア各国で民族解放戦争や民族独立運動（第二次大東亜戦争）が戦われ、それぞれの国が独立を果たしたのである。

なかに、大東亜戦争（第一次）以降もそのまま現地に残って教え子達と共に独立戦争を戦い、現地に骨を埋めた日本軍将兵も多いことは、今もアジア各国で、感謝の言葉とともに語り継がれている。

バンドン会議

昭和30年４月、インドネシアのバンドンで第一回アジア・アフリカ会議が開催された。この会議には、かって西欧勢力の植民地支配の下にあってその後独立した有色人種国家の代表が集まり、反植民地主義、平和共存、民族自決、人種平等などが決議されたが、この席上で各国の代表から異口同音に、日本側代表に対し「日本が多大の犠牲を払って大東亜戦争を戦ってくれたお陰で、今日我々は白人諸国と対等な立場で居れるようになった」との感謝の言葉が述べられたことは誠に意義深いものがある。

第１回アジア・アフリカ会議（バンドン会議）

日本の戦った大東亜戦争は、日本が目指した戦争目的どおり、西欧の植民地支配を終焉させ、有色人種の独立国家の誕生をもたらし、人種平等の世界形成に影響を与えた。これこそ、大東亜戦争の世界史的意義である。日本は、軍事的には敗北したが、政治的には大勝利を収めたのである。

しかし、この勝利は、戦場に散って逝かれた２４０万戦没者の尊い血によって贖われたものであることを、我々は決して忘れることは出来ない。今日のアジアの繁栄を見るにつけ、この繁栄と隆昌の礎となられた戦没将兵の偉業に、改めて感謝の念を覚え、御霊の平安を心から祈念するものである。

（柚木文夫記）

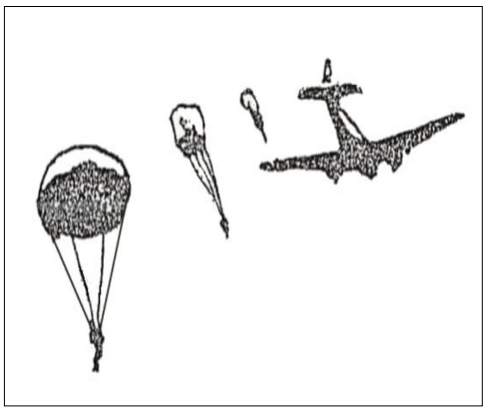
パレンバン空輸挺身作戦と慰霊

その３　慰霊

和泉　洋一郎

三　パレンバン空挺作戦戦死者の慰霊

１　挺進第２連隊の戦死者



昭和17年2月14日、「一部をもって精油所を、主力をもって飛行場を攻撃し、これを奪取すべし」との任務を有する挺進第2連隊長甲村武雄少佐（挺進連隊長は少佐職）以下339名の第1次降下部隊は、輸送機33機に分乗してマレー半島南部のカハン飛行場を離陸、1120、ムシ河口上空に達し、飛行場方向と精油所方向に分進。飛行場攻撃部隊は1126、精油所攻撃部隊は1130、それぞれ高射砲火を冒して降下、数倍の連合軍と激戦の後、飛行場と精油所をその日のうちに占領し任務を達成した。

この作戦による挺進第2連隊の戦死者は37名とされている。（この他、行方不明1名、対空砲火によって自爆した飛行第98戦隊の重爆1機の乗員2名が戦死）

戦死形態別では、降下の際、不開傘（落下傘が開かない）による戦死2名、着地後の戦闘による戦死35名。

地区別では、飛行場地区31名、精油所地区6名。

隊別では、連隊本部17名のうち3名、通信班30名のうち6名、第2中隊96名のうち6名、第4中隊97名のうち16名の戦死者であった。

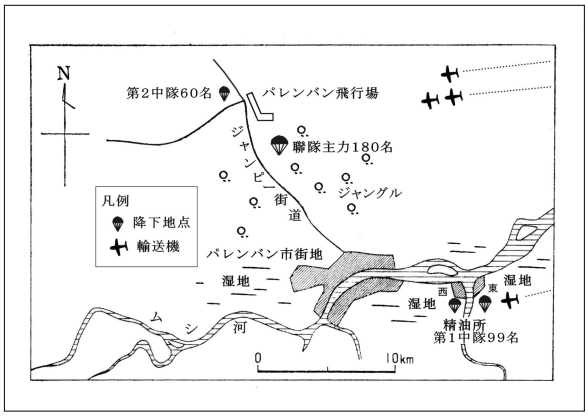
また、精油所地区を攻撃した第1中隊99名のうち6名が戦死している。

階級別では、将校2名、下士官・兵35名。

年齢別では、戦死者全員が20代の若者であった。最高年齢で27歳、最少年齢は23歳であった。

２　戦死者収容と慰霊

（１）パレンバンにおける慰霊



作戦後に戦場掃除が行われ、戦死者の収容が行われた。遺体は飛行場事務所横のゴム林で火葬に付された。その時の様子が高山正之、奥本實共著「なぜ大東亜戦争は起きたのか？空の神兵と呼ばれた男たち」（ハート出版）に詳しく書かれているので転載させて頂く。

「2月16日、私（奥本實中尉。第4中隊第3小隊長）は使役兵に命じて、飛行場事務所横のゴム林中に、等身大の穴を整然とならべて掘らせた。深さ1メートル50センチ。そして付近の枯れ枝を集めて穴の底より1メートルの高さに綺麗に積んだ。その上に一人一人の死体を穴毎に別々に安置した。死体の頭の付近に一人一人の名札を地面に植え付け、死体の上に更に50センチの高さに枯れ木を積み、その上にトタン板を被せて準備は終わった。この夜は、霊前歩哨を立たせた」

「2月17日、火葬の火付け式を行った。甲村連隊長、各中隊長に立ち会ってもらい、読経の経験者の伍長に念仏を誦えさせた。トタン板をまくり、枯れ木にガソリンをふりかけ、再びトタン板で覆い、私が点火したのである。読経の声の中、生存者の戦友に『捧げつ銃』の敬礼をさせた」

「2月18日、戦友の骨拾いである。一昼夜くすぼらした死体は、各穴の底にきれいに白骨となって残っていた。（中略）誰が作ってくれたか、長さ50センチメートルぐらいの白い新しい箸で、各隊長、戦友あるいはその部下の手で、そのきれいに出来上がった白骨を拾ったのである。この骨は白木の箱に入れ、パレンバン市街の宿舎に持ち帰り、安置した」

「2月19日、市街の将校宿舎で37柱（もう1柱の行方がどうしても判らない）の英霊の慰霊祭が厳粛に執行された。この英霊の本骨は後日、宇田川中

尉以下数名が宰領して、内地に凱旋させた。そしてその残骨は、火葬を行ったゴム林に纏められ、墓地として祀られたのである」

さてこの墓地は、この作戦終了後もこの地を訪れる各部隊や、パレンバン市内に住む在留邦人ら、特に夫人会員らによって墓参の絶え間がなかった。

またこの墓地に面した一本道路の入り口に、高さ20メートルもある「挺進部隊奮戦之地」の忠魂碑が建立され、線香の煙と生花の供えがたえなかった。

また、戦死した連合軍将兵も収容し、懇ろに葬り、十字架を立て、献香供花したという。

（２）日本における慰霊

作戦終了した挺進部隊は、昭和17年6月、海路帰還し、宮崎県新田原兵舎で挺進団としての慰霊祭を盛大に執り行っている。

３　終戦時における英霊

（１）パレンバンの状況

終戦と同時に、ゴム林内墓地にあった遺骨（残骨）は掘り返され、別の場所に埋葬された。

この時の様子を前述の元第４中隊第３小隊長であった奥本實氏に当時在パレンバン第76飛行場大隊長であった渡辺政美少佐（少尉候補者第13期）が戦後（昭和36年3月26日）語ったところによれば、「私は飛行場大隊長という責任上、この飛行場の礎となった英霊の有難味がつくづく解っているので終戦処理にあっては特に慎重を期した。

丁度連合軍が来る前日、記念碑と墓標を撤去して夕刻近くに英霊の遺骨を発掘した。夜に入って付近の将兵を集めて墓地南側の小川の線に密かに埋め、僧侶出身の将校の読経のもとに厳粛に鎮座を終えて葬り去ったのである。連合軍進駐以来、この処置については全然気付かれずに済んでホッとした次第です。

連合軍進駐後は、敵軍の発掘も命ぜられてその敵軍の骨の引き渡しも無事終えたが、その数は全く無数にのぼり、掘っても掘っても骨が出てくるのには一同改めて驚いた次第です。いかに勇猛に友軍落下傘将兵が奮闘したか偲ばれて感慨無量でした」とある（筆者が奥本實氏の長男である奥本康大氏から提供された實氏手記による）。

なお、渡辺元少佐は、この半年後に忽然と亡くなられたとのことで、終戦時の処理について、占領勇士に報告出来て安堵されたかもしれないと奥本實氏は記述している。

（２）日本における状況

終戦時、挺進集団主力（第２挺進団基幹）は、ルソン島、セブ島、ミンダナオ島などに展開しており、内地にあったのは、本土決戦に備えた第１挺進団などであった。挺進第１連隊が千葉県横芝に、第１挺進団司令部と挺進第２連隊が宮崎県唐瀬原に配備されていた。

その唐瀬原には、訓練中の犠牲者や作戦で戦死した英霊を祀るための挺進神社が昭和19年に建立されており、終戦時には、パレンバン、ラシオ、フィリピン、沖縄作戦等で亡くなった空挺部隊及び協力部隊約１万２０００柱が第１挺進団によって祀られていた。

しかし、昭和21年、進駐してきた米軍マスマン少佐は、挺進部隊だけを祀る神社は認められないとして破却してしまった。これにより、空挺部隊の英霊は拠り所を失ってしまった。

４　戦後の慰霊（パレンバン作戦を焦点として）

（１）パレンバンにおける慰霊

現在、パレンバン市内には、パレンバン日本人会が昭和45年11月建立（平成13年改修）した納骨堂と、元パレンバン日本人会会長であった埒敏（さこさとし）氏が自邸内「静華苑」に平成7年3月10日建立した慰霊碑「平和祈念之碑」がある。

日本人会建立の納骨堂には、前述の飛行場地区から遷座された英霊の遺骨（分骨）とインドネシア独立戦争で亡くなった方々が祀られており、ここには訪れる日本人は多い。最近では、在インドネシア日本大使が２０１７年７月に訪れ献花している。

しかしながら、埒氏邸にある慰霊碑は知名度が低いのか訪れる方は少ないようである。

平和祈念之碑には「先ノ世界大戦ニパレンバン及ビ其ノ周辺海域並ビニ島内各地ニ於イテ故国ノ土ヲ踏ムコトナク散華セラレタル英

パレンバン市の日本人納骨堂

霊ヲココニ祭ル」とある。

挺進第2連隊を始め、第18航空情報隊、第1航空通信連隊、第9飛行師団（飛行第58戦隊、第46飛行場大隊、第16野戦航空修理廠第2分廠）、南スマトラ燃料工廠、軍艦「足柄」、高射砲第103連隊、パレンバン憲兵分隊、兵站自動車第160中隊の名がある。（裕敏氏は平成23年86歳で死去されている）

是非パレンバンを訪問された時には両所ともお参り下さい。

（2）日本国内における慰霊

挺進神社を喪失した旧挺進隊員達による新たな慰霊施設建立の動きが始まった。それは戦後の困窮した生活の下での困難な活動であったが、次のような成果をもたらした。

ア　川南護国神社に挺進部隊の英霊合祀

挺進神社の再建を願う元第1挺進団長であった中村勇氏を中心として元挺進隊員達は奔走して、昭和24年に地元川南村出身の英霊634柱と挺進部隊の英霊を合祀する霊堂を建立することになった。

その経緯について、平成2年11月23日に陸軍空挺部隊戦友一同によって建立された「空挺落下傘部隊発祥之地」（川南護國神社境内）の碑文に次のように記されている。

「昭和16年川南村にあった広大な軍馬補充部の牧場が落下傘部隊の降下場に転用され同年9月から使用を始めた。

翌17年には兵営が建設され　数千の落下傘兵がこの地で練武に励んだ。

天下る落下傘兵は　天孫降臨になぞらえて空の神兵と称され　村人の庇護後援のもと精鋭誇る空挺部隊が練成され　次々と南の決戦場に出て征き活躍した。

しかし　我々の悲願も空しく戦敗れ　多くの戦友が戦野に屍を晒し　その御霊だけが当時豊原にあった陸軍挺進練習部構内の挺進神社に神鎮り給うたのである。

ところが　21年初夏の頃宮崎県に進駐していた米軍は　理不尽にも挺身神社を焼払ってしまった。

拠り所を失った英霊は　当時旧兵舎を校舎にしていた宮崎師範学校の寄宿舎周辺を　毎夜白い体操衣袴姿で走り廻るという噂が立った。

そのようなことがあって　一時唐瀬の石川富士之助翁の仏壇にお祭りし更に昭和24年この護國神社が再建されるに及びここに合祀し今日に及んでいる。

護國神社の祭祀は　川南護國神社奉賛会によって永久に行われることに感謝し後世のためここに由来を刻しておく次第である」

イ　高野山への遷座

米軍による挺進神社焼き打ちに対し奮起していた別の人物があった。元挺進第3連隊軍医中尉中村秀雄氏で、職務上多くの戦友を看取った関係上、いつか「亡き友の慰霊」と「挺進精神の昂揚・継承」を形あるものにしたいと願っていた。

大阪市で外科医院を営む傍ら浄財を集め、私財を投じ、高野山当局を説得し菩提寺を不動院と定め、空挺落下傘部隊将兵の墓「空」を聖地高野山奥の院一の橋に建立した。（何故「高野山」なのか、「空」なのかについて、中村秀雄氏は「霊は霊地にあるべきで、全国から人の参拝の絶えない最も幽玄な地を選び、高野山にあっては弘法大師空海の一文字であり、空挺の空であり、一切空の空から選んだ」と述べられている）

そして、昭和31年9月23日、川南護国神社から高野山への挺進隊員1万余の遷座を果たしたのと同時に「空挺戦友会」を発足させ、例祭を毎年行うことを取り決め慰霊の基盤を築いた。

なおこれに連動して高野山に近い信太山演習場において第1空挺団の供覧落下傘降下演習が相当の悪天を衝いて行われたことは特筆すべきことであった。

ウ　「全日本空挺同志会」の発足

中村軍医らの尽力によって、「空挺戦友会」が結成されたものの、旧軍人だけの組織であり、いずれ消滅することは必至であり、慰霊の担い手が居なくなることが危惧されていた。

一方で、昭和30年自衛隊が発足し、第1空挺団が昭和33年に編成完結となったものの、空挺団としては、技術面では米軍に範は取るものの、精神面では旧挺進部隊に求めるべきだとの意見が

強くなっていた。

こうした両者の希求するところが合致して昭和36年５月、旧陸軍挺進隊員、現職空挺隊員及び元空挺隊員から成る「全日本空挺同志会」が発足したのである。現在、各都道府県に支部を設け、数千人の会員を擁する組織に成長し、様々の行事を通じて落下傘を通じた絆を深めている。（筆者もその一会員）

エ　現在の慰霊の状況

現在、パレンバン作戦関連の慰霊祭は高野山と川南護國神社の２カ所で執り行われている。その状況が全日本空挺同志会発行の「落下傘」という機関誌に記載されているのでご紹介する。

（この他、空挺関連では「義烈空挺隊慰霊祭」が毎年沖縄や健軍において、執り行われているが、今回はパレンバンが名目であるので割愛する。）

（ア）高野山慰霊祭

「平成29年９月３日、聖地高野山奥の院、一の橋『空』の墓碑前において、全日本空挺同志会（会長・直海康寛）が主催する高野山慰霊祭が、秋晴れの中、厳粛に執り行われた。

今年で62回目を迎える本年の慰霊祭は、天候にも恵まれ、参列者は約２７０名を数えた。菩提樹の不動院から一の橋までは、支援の第37普通科連隊音楽隊（信太山）を先頭に慰霊行進が粛々と行われ、行事参列以外の観光客や海外からの観光客がカメラを手にする姿も見受けられた。

行進が『空』の碑前に到着後、執行委員長である伊丹理事長の『開祭の辞』により慰霊祭は執り行われ、近畿連合支部による献灯、国旗掲揚、黙祷と続き、導師（山階不動院住職）が入場、読経の声が響く中、新たに６柱の遺骨を安置した。

続いて直海会長による斎主祭文、兒玉空挺団長による追悼の辞が読み上げられた後、高野山委員が支援し、納骨、焼香が実施され、その後、新合祀者遺族を代表して永澤氏による挨拶が行われた。最後は、『空の神兵』を参加者全員で合唱、国旗降下となり、参列者は高野山慰霊祭の意義を再確認し、落下傘部隊将兵と新合祀者を含む約１万２０００余の英霊の御霊に祈りを捧げ、第62回高野山慰霊祭は幕を閉じた」（「落下傘」平成29年11月１日第４３７号第１面から転載）

空挺同志会高野山慰霊祭

（イ）川南護國神社秋季大祭

「平成29年11月23日に宮崎県児湯郡川南町において『川南護國神社秋季大祭』が挙行された。

前日22日には恒例の前夜祭が、全国から80名を超える参加者の下、『ホテル竹之屋』において盛大に行われた。

宮崎県支部・横山事務局長の開会の辞に続き、英霊に対する黙祷を実施し、護国の御霊の遺勲を偲んだ後、愛甲宮崎県支部長、直海全日本空挺同志会長、兒玉空挺団長、日高川南町長が挨拶し、続いて西部方面総監部・戒田将補による発声の下乾杯が行われた。（中略）

23日当日は穏やかな秋空の下、約80名の参加者で『川南護国神社秋季大祭』が盛大に執り行われた。全日本空挺同志会からは直海会長を始め、愛甲宮崎県支部長、千葉県支部、山梨県支部、福岡県支部、佐賀県支部、長崎県支部、熊本県支部　の代表者が参加、自衛隊関係者も空挺団から兒玉団長以下11名を始め、西部方面総監部防衛副長、宮崎地方協力本部長、第５航空団整備補給群司令、第24普通科連隊長、第43普通科副連隊長が参加した。

祭典は祭典奉仕者入場により開始され、国旗掲揚、英霊に対する黙祷、神事と続いた。神事は修祓、開扉、献せんの後、斎主祝辞奏上、指名による玉串奏曾並びに祭詞奏上が行われ、撤せん、閉扉で厳かに終了した後、奉賛会長挨拶並びに遺族協力会長謝辞が行われた」（「落下傘」平成30年１月１日第４３８号第４面から転載）

いずれの記事からも、パレンバン作戦に於ける英霊を始めとして空挺落下傘部隊将兵の英霊が盛大かつ厳粛に慰霊されていることが見て取れるであろう。（終）

（パレンバン作戦記念日２月14日記）

川南護國神社秋季大祭

占守島の戦い

その2

岩田司朗

3　水際撃滅の態勢成る

北千島特有の濃霧のため、戦勢は混沌として容易に判明しなかったが、18日午後に入り、師団長はようやく次のような状況を把握した。

「先遣隊は勇猛果敢な突進を敢行し、概ね四嶺山の線付近から火力戦闘を開始、じ後敵線を突破しつつ、肉薄蹂躙戦に移行した。敵兵力は目下歩兵3コ大隊を下らないもののごとく、これに対し大きな損害を与えはしたが、わが損害もまた少なくないようである。また國端及び小泊崎の洞窟陣地を死守している部隊は健在である。

すでに在幌筵島の歩兵部隊の大部は占守島に向いつつあり、歩兵第74旅団司令部も同島進出を準備中で、ここに両旅団並列して戦闘する態勢が整えられつつある。」

ここにおいて師団長は逐次態勢を整理し、後続部隊の戦場到着と相俟って漸次優勢な兵力と態勢をもって一挙にソ軍を水際に撃滅する方針を採った。

然るに戦闘酣のころ、「戦闘を停止し、自衛戦闘に移行すべし」との方面軍命令に接したのである。

五　積極戦闘停止

1　軍使派遣、防御に転移

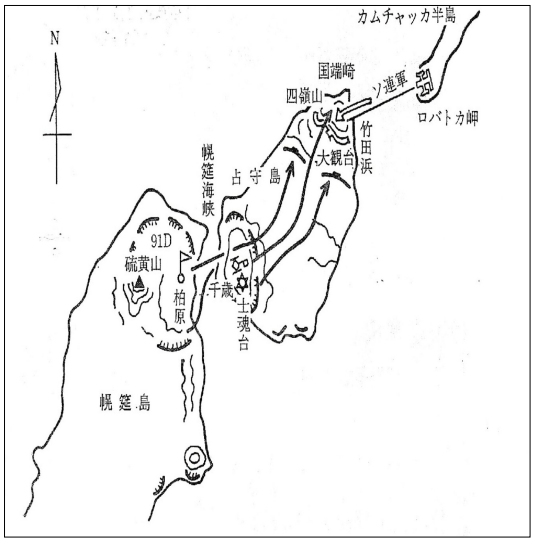
方面軍命令に基づき、師団長は、師団司令部付の長島厚大尉（19年10月戦車第11連隊から司令部作戦情報係に転属）を軍使としてソ軍に派遣するとともに、8月18日16時をもって攻撃を中止し防御に転移するよう命令を発した。

長島大尉以下約10名からなる軍使は、同日15時頃、大観台を発進した。

軍使一行は彼我相対峙する戦線を通過しようとしたが、ソ軍の射撃により陣内潜入ができず、2030頃、長島大尉は単身敵陣に向った。

すでに杉野旅団は朝来の戦闘によりソ軍を海岸線2～4㎞の距離に圧迫していたが、軍使派遣に併せて師団から「若し敵が進出するならば、その場において自衛戦闘を実施せよ」との命令を受領し、16時、所命行動に転じた。

しかし、ソ軍は戦闘を中止することなく、夜間に入ってから、随所で攻撃を続行し、四嶺山西方にまで進出してきた。



戦車第11連隊の戦闘経過要図

2　両軍相対峙状態に入る

随所に小戦闘が繰り返されつつ19日を迎えた。旅団は、一歩でも退けば停戦時の地域を失うことを考慮し、地形の利、不利にかかわらず、ひたすら現陣地線を保持すべく戦闘を指導した。

彼我の距離は近いものは50ｍにも満たず、互いに散兵壕を掘りながら攻撃に備え、対峙した。彼我の撃ち合う銃声は各所から聞こえてきた。

我が軍が積極的戦闘を中止している間、ソ軍は後続部隊を上陸させ、逐次その兵力を増大するとともに、柏原地区に対する爆撃を継続した。

3　幌筵海峡接近のソ連艦艇を撃退

8月19日朝7時ころ、ソ連艦艇3隻が幌筵海峡北口に接近してきた。

潮見崎に在った海軍警備隊は、高角砲をもってその進路前方に射撃を加え警告を発し停戦を要求した。

ところが3隻は、一斉に砲門を開き片岡飛行場方向を射撃したが、約10分後、わが艦攻2機が離陸するに及んで、急ぎ反転霧の中に退却した。

六　戦い終る

1　ソ連の要求を拒否

敵中に入った長島大尉は、19日朝になっても帰還しなかったため、杉野旅団長は旅団司令部付の山田大尉、木下少尉、日魯漁業の通訳を軍使として派遣した。

山田大尉らは、國端崎でソ軍指揮官アルチューヒン大佐に会うことに成功した。

1500正式軍使と竹田濱で会おうとのソ軍側の申し出に、杉野旅団長、柳岡参謀長、加瀬谷第1砲兵隊長がソ軍の陣内に赴き、小泊崎付近で交渉に当った。

わが軍の要求はまず停戦であるのに対し、ソ軍は停戦即武装解除を要求し、交渉がかみ合わなかったが、無用の流血を避けるためソ軍の要求を容れ、２０００ころ、大観台に帰還した。

師団長はこの報告を聞き、停戦は承認したが、武装解除は承認しなかった。

ソ軍は、この夜停戦合意に反し、四嶺山東方斜面方向から夜襲をかけてきたが、これを予期して火器の配置、射撃準備を行っていた山田大隊は、一斉射撃でこれを阻止し、一兵をも陣地に入るのを許さなかった。

２　ソ軍、後続兵力を展開

師団が戦闘を停止し停戦交渉に任じている間、ソ軍は19日一杯かかって火砲、弾薬、車両の揚陸を終了した。

柳岡参謀長の停戦交渉とかかわりなく、兵力の集結を終えたソ軍は、８月20日大観台北方に展開し攻撃準備を始めた。

占守街道正面を守備中の山田隊長は、８時頃「四嶺山東方稜線上にソ連兵が見え、戦車も見える」との報告を受け、占守街道正面第一線中隊に対戦車防御の重点を置き配備を増強した。

小戦闘が繰り返され20日が過ぎた。

大観台北方のソ軍は展開を完了している模様であり、再度停戦交渉に向った柳岡参謀長は未帰還である。

このまま事態を静観すれば師団が危殆に瀕すると判断した師団長は、この敵を撃破し、もって師団の安全を確保することに決し、８月21日６時をもって攻撃を再開する旨を命令した。

命令伝達が終わった直後、師団は方面軍から、停戦、武器引き渡し容認に関する命令に接した。

３　停戦、武装解除

８月21日、参謀長柳岡大佐は、軍使長島大尉及びソ軍将校数名を帯同して大観台に帰還した。ここで再び交渉が行われ、師団の企図する方向に交渉がまとめられた。

かくて彼我の戦闘行動はようやく終熄し、師団は23日、24日にわたり武装を解除した。

六　戦果及び損害

占守島の闘いは、終戦の詔勅が下り、継戦意欲を削がれた第91師団が、ソ軍の奇襲攻撃を受けてやむを得ず自衛のために蹶起した戦いであった。

現地守備隊の反撃は、十数時間に過ぎないものであったが、広い上陸正面に配置した拠点陣地と戦車部隊の機動打撃により、文字通り水際撃滅を現出したものであった。

上陸を企図したソ軍約３，０００は、水際達着前に舟艇を撃沈され、水に浸かりながら辛うじて海岸に辿り着いたが、水際陣地守備部隊や池田戦車連隊などの反撃により、死傷またほぼ同数を下らないものと言われている。

ソ連政府機関誌イズベスチャ紙は、「占守島の戦いは、満州、朝鮮における戦闘より、はるかに損害は甚大であった。８月19日はソ連人民の悲しみの日である」と述べている。

わが軍の損害は、死傷約６００名、野砲２門、10㎝加農砲１門、15㎝加農砲１門、高射砲１門、戦車10数両破壊と言われている。

しかし、武装解除に引き続く部隊の分割、作業大隊の編成、他方面への転用、抑留により、詳細な調査ができていないのが現実である。

七　慰霊巡拝、遺骨収集

占守島における戦いが終焉した後の状況を、大野芳著「８月17日、ソ連軍上陸す―最果ての要衝・占守島攻防記―」（株式会社新潮社刊）では、次のように語られている。

「占守島の武装解除は、８月23日に三好野飛行場で行われた。

その日正午、小雨そぼ降る中、杉野厳少将は、一万三千の将兵を前に最後の別れの閲兵を行った。

総員、南西に向かって直立不動の姿勢をとり遥拝した後、、君が代を斉唱した。

将兵は、流れ出る悲憤の涙を如何ともすることができなかったという。

（『戦車第十一聯隊史』）

やがて現われたグネチコ少将と杉野少将が握手をした。戦車隊の須田謙吾准尉は、三好野に現れなかった。千歳台の幕舎跡で、軍刀を前に端坐し、拳銃自決した。遺体が発見されたのは、その日の午後であった。

将兵の遺体収容は、加瀬谷陸男中佐が再三にわたってソ連軍と交渉した結果、ようやく９月半ばに許された。

ソ連軍は、日本の将校と兵士を分離し、一千人単位の将校大隊と、同じく准尉を長とした15の作業大隊に編成したために、戦車隊の遺体収容作業は将校だけで行うことになった。（中略）

一方、他の陸軍部隊でも戦場整理のために作業大隊が編成され、それぞれ遺体の確認と埋葬が行われた。

しかしその資料は、ついに日本に持ち帰ることはできなかった。また、この作業大隊はソ連軍の戦死者をも収容したが、彼らは無造作に油をかけて燃した、という。（中略）

長島厚大尉ら師団司令部の将校が柏原を出航したのは、12月８日だった。

そして将校大隊に順番が回ってきた

のは、12月27日である。

『内地に帰還するが、内地は物資が不足している故に荷物を出来るだけ多く携行して乗船するように』と、篠田中尉達はソ連軍将校から告げられた。

明けて昭和21年1月1日早暁に乗船、夕刻出航、流氷の漂う海を航行した。

『ダモイ・トウキョウ（東京に帰る）』と、ソ連の船員たちは笑顔で言った。

南に進路をとりながら船の着いたところは、零下二十度のナホトカだった。

将校は軍刀を没収され、それぞれのラーゲル（収容所）へ送られることになる。（以下、略）」

北千島慰霊碑（札幌護国神社境内）

札幌護国神社の境内に、北千島慰霊の会によって昭和50年8月23日、「北千島慰霊碑」が建立された。碑銘の揮毫は、当時の北海道知事堂垣内尚弘氏の筆によるものである。

台座にはめ込まれた石板には、本稿に記述した占守島における作戦・戦闘の全容が簡潔に記述されており、その最後には、「茲ニ戦友遺族相侍リ、国ノ英霊神鎮マリマス札幌護国神社ノ境内ニ碑ヲ建テ、ソノ武勲ヲ讃エテ、英魂ノ永遠ニ安ケキヲ祈念スルモノナリ」と結ばれている。

占守島への慰霊巡拝は、平成7年7月下旬及び平成17年8月～9月に、厚生労働省の計画で実施された。

この慰霊巡拝には、北千島慰霊の会、士魂会、遺族の方々が参加され、占守島に上陸し、激戦地の跡を訪れ、四嶺山において追悼式が挙行された。

慰霊巡拝と同時期に遺骨調査団が編成され、遺骨調査が実施されてきている。

また、ロシア側は、平成26年から軍や戦史研究団体が本格的な調査を行い、日本軍、ソ連軍双方の兵士とみられる遺骨や遺品を収集しており、平成26年に6柱、平成27年に27柱が発見されたとの報道がある。

平成2年から今日まで43柱が収集され帰国している。

八　「占守島の戦い」が遺したもの

日本がポツダム宣言の受諾を表明し、大東亜戦争に終止符が打たれた8月15日以降、樺太では依然として戦闘が継続されていた。そして、8月18日には千島列島の北端で展開されたソ連軍と第91師団将兵との戦いを、後世にどのように伝えていくべきであろうか。

降伏を宣言した日本領へ、不法にも土足で乗り込んできたソ連軍に対し、敢然と立ち向い、その企図を粉砕するとともに、じ後の武力侵攻を慎重にさせ、北海道侵略の野望を断念させた将兵の偉業には、筆舌し難い尊さを感じざるを得ない。

永く辛苦の戦いから解放されて、妻や子、親の元に還り、新たな生活を夢見ていた彼らが、正に晴天の霹靂の現実に、身命を賭して守り抜いたものは何であったろうか。

早坂隆氏は、歴史街道（平成27年12月号）への執筆記事で、第5方面軍司令官樋口季一郎中将の孫・隆一さんが、父季一郎から聞かされた話として「日本の歴史家は、あの戦争の負け戦ばかりを伝えている。しかし、中には占守島の戦いのような勝ち戦もあったし、だからこそ今の日本の秩序や形が守られている。負け戦を語ることも大事だが、その一方で、重要な勝ち戦があったことについても、しっかりと語り継いで欲しい。」という逸話を紹介している。

また、前掲の大野芳著「8月17日、ソ連軍上陸す」では、そのあとがきで、戦車連隊長・池田末男の遺児である池田誠氏は、私にこんなことを言った。

「一時、よく遺族から母に電話がありましてね『なぜ、連隊長は、一人で降伏し、自害しなかったのか、部下を道づれにすることはないではないか』とね。だから司馬遼太郎さんなんかも、『日本を滅ぼしたのは、軍人だ』といいますけど、ボクのオヤジについては、そうまでは言わない。だけどずっとそのことを気にしていました。

戦争が終結してからの突撃である。なんとかならなかったものかと、遺族の無念さが言わせるのだろう。それほど占守島の戦闘は、特殊なケースだった。」（以下、略）と述べている。

誰にも正解は見つからない。戦後、時が経ってからは、いろいろなことが言えるであろう。しかし、肉親を想い、郷土を想い、日本を想いながら敢然と立ち向っていった将兵のことは、後世に生きるわれわれ日本人として、永久に脳裏に焼き付けておくべきであると確信する。

ユダヤ人難民を救い、ソ連の北海道北部占領を阻止した将軍
樋口　季一郎

一　はじめに

アリューシャン群島の戦い、占守島の戦いについて連続して紹介したので、ここで、これらの戦いを指揮し、ソ連の北海道北部占領の野望を阻止した樋口季一郎将軍について紹介したい。

二　経歴

樋口将軍の主要な経歴は次の通りです。

○明治21年　兵庫県三原郡本匠村で廻船問屋を営む奥濱家の長男として誕生
○明治35年　大阪地方幼年学校入学
○明治42年　陸軍士官学校卒業（21期）　歩兵第1連隊に配置
また、樋口家（叔父の家）の養子となり樋口姓を名乗る。
○大正7年　陸軍大学校卒業（30期）、在学間に東京外語大でロシア語を徹底的に学ぶ。
○大正8年　参謀本部勤務を経て、シベリア出兵派遣軍司令部の特務機関員として赴任、この間にユダヤ人貿易商の家に下宿し親しくなる。
次いでハバロフスクの特務機関長として勤務する。
○大正14～昭和3年　ポーランド公使館付武官。この間ウクライナ等視察
○昭和8～10年　大佐に昇任し、福山歩兵第41連隊長として勤務
○昭和12～13年　少将に昇任し、ハルピン特務機関長として勤務。この間、ナチスやソ連の迫害からシベリア鉄道経由で逃れてきたユダヤ人のソ連からの脱出を人道主義に基づき援助している。（オトボール事件）
事件後、参謀本部第2部長に異動、情報・諜報を担当し、ユダヤ人対策要綱の策定、汪兆銘の重慶からの脱出工作を実施
○昭和14年　ノモンハン事件の停戦に努力した後、中将に昇任し金沢第9師団（在満州）師団長として赴任
○昭和17年　樺太、千島、アリューシャン、北海道、北東北の防衛を担当する北部軍司令官（司令部札幌）に就任
○昭和18年　北部軍改編で北方軍司令官に。この間アリューシャン群島の戦い（アッツ島玉砕、キスカ島撤退）を指揮。
○昭和19年　北方軍改編で第5方面軍司令官に
○昭和20年　北部軍管区新編で、兼北部軍管区司令官に
8月15日の終戦後も第5方面軍司令官兼北部軍司令官として千島樺太の防衛作戦を指揮
○昭和20年12月1日　予備役編入

三　主要な功績

樋口将軍の主要な功績として、ユダヤ人難民の救出、アリューシャン群島の戦い及び千島・樺太防衛作戦について紹介したい。

1　ユダヤ人難民の救出（オトボール事件）

樋口がハルピン特務機関長在任時の昭和12年12月、ハルピンユダヤ人協会会長カウフマン氏から「ナチスドイツのユダヤ人迫害の非道を世界に訴える」ための「極東ユダヤ人大会」の開催許可を要請された。樋口はこれを快諾、同月26日に「第1回極東ユダヤ人大会」がハルピンにおいて開催された。

この大会に招待された樋口は、個人の資格で出席し、祝辞で「ユダヤ民族に対する高い評価とともに、ナチの反ユダヤ政策を批判し、『追放の前に土地を与えよ』」と述べ万雷の喝采を浴びた。

昭和13年3月、ナチスドイツ、ソ連等で迫害を受けた多数のユダヤ人難民が、ユダヤ人の受け入れを制限していない満州国に逃れ、その後亡命先の上海米国租界等に移動するため、シベリア鉄道経由で満州国の満州里から北20㎞にあるソ連の寒村オトボール（現ザバイカリスク）に押し掛け、満州国に助けを求めた。

五族協和を唱っている満州国は、本来なら入国の手続きをすべきところを、同盟国ナチスドイツに遠慮してこれを拒否したため、難民はオトボールに足止めされた。

オトボールは、この時期夜は零下数十度まで下がるため、着の身着のままで逃れてきた難民は食料も尽き、凍死者が続出する事態になり、進退窮まってしまった。

難民たちの窮状を承知したカウフマン氏は、樋口に難民の窮状を訴えるとともに救助を要請した。

樋口は、要請を受け入れ、即日難民への給食、衣類・燃料の配布、要救護者の治療を実施するとともに、満州国への入国許可の働きかけ、上海租界等への出国の手配、更には救援列車の手配を実施した。

救援列車は、２日後満州里に到着、満州里とハルピン間を往復し、ユダヤ人難民をハルピンに輸送、難民は公共施設等に収容された。

その後、オトボールルートを頼るユダヤ人難民は増え続け、数千人～２万人が救出されたといわれているが、正確な数は記録に残っておらず定かではない。

オトボール事件後、ナチスドイツは、在日大使を通じて強硬な抗議を実施、外務省からこの抗議を回送された陸軍省は関東軍に調査を依頼した。

関東軍から呼び出しを受けた樋口は、関東軍司令官植田大将に、自分の考えを述べた書簡を送るとともに、司令部に出頭し、総参謀長東条英機中将に面会し、

①今回の行動は人道上の配慮に基づくものである。ドイツのユダヤ人迫害は人類の敵というべき行為である。

②法治国家として当然のことをしたまでであり、私のしたことは間違っていない。

と堂々と陳述した。

東条総参謀長は、樋口の陳述に理解を示し、オトボール事件を不問にすることにし、司令官の同意を得て陸軍省に回答、処分案は取り消された。

ハルピン特務機関長の任務を１年で終えた樋口は、陸軍参謀本部第２部長に栄転し、陸軍全般の情報・諜報分野を束ねることとなった。

２　アリューシャン群島の戦い

アリューシャン群島の戦いは、「慰霊40号」で詳しく書いたので、ここではなぜアッツ島守備隊が玉砕し、キスカ島守備隊が撤退に成功したかを主体に紹介したい。

昭和17年８月に北部軍司令官として着任した樋口中将は、米軍の反攻態勢が着々と進んでいるのをみて、「キスカ、アッツ両島の守備隊を撤収するか、強力な部隊を増援するかを早期に処置しなければ、アリューシャンの作戦は困難」と判断し大本営に具申するが、海軍は燃料不足を理由にこれを拒否したため、両島守備隊はほとんど増援のないまま米軍の反攻を迎えることとなった。

18年５月に米軍がアッツ島に上陸した時も樋口は海軍に出撃を要請したが、損害を恐れる海軍はこれを拒否した。

制海権・制空権も無く孤立無援となったアッツ島守備隊に対し、大本営は初めて玉砕を命じた。樋口は、この命令を受けた時号泣したといわれている。

しかしながら、樋口はこの命令を受け入れる条件として、大本営にキスカ島守備隊の撤退を約束させ「アッツ島放棄、キスカ島撤退」が決まった。

樋口がアッツ島守備隊に与えた命令の最後には「最後に至らば潔く玉砕し、皇国軍人精神の清華を発揮するの覚悟あらんことを望む」と記述されている。

この命令に対し、アッツ島守備隊長山崎大佐は、「我軍は、最後まで善戦敢闘し、国家永遠の生命を信じ、武士道に殉ずるであろう」と返電し、山崎大佐を陣頭に最後の突撃を敢行し突撃し、玉砕したことは既に紹介したとおりである。

キスカ島守備隊の撤退は、既に「慰霊」40号で紹介したとおりである、成功の原因は、①アッツ島守備隊の善戦敢闘、②濃霧に恵まれた、③収容艦隊の果敢な行動、④キスカ守備隊の企図の秘匿と迅速な撤退行動、⑤米軍艦隊の弾薬補給のための一時的撤収　等多くあるが、最大の成功要因は、アッツ島玉砕を受け入れることと引き替えに、キスカ撤退のために海軍艦隊の派遣を約束させた樋口軍司令官の部下を思う執念にあったように思う。

この執念があればこそ、大本営の決裁を仰がず、独断で全ての武器を海中投棄させ、乗船時間を短縮し、約１時間で全ての人員の収容を完了するという離れ業ができたように思う。

３　千島・樺太防衛作戦

日本政府は、８月15日に終戦を決定、大本営は、８月16日に全部隊に対し戦闘行為の即時停止を命令するとともに、18日午後４時以降の自衛目的の戦闘行動も全て停止するよう命じた。

しかしながら、北海道の北半分の占領を企図するスターリンは、終戦後もソ軍に千島と樺太両正面から攻撃を続行させた。

樋口第５方面軍司令官がこの命令のとおり隷下部隊に自衛戦闘も禁じ停戦を命じていたら、千島・樺太両正面の戦いは早期に終了し、ソ連の北海道北部占領は易々と達成されたであろう。

上級司令部の命令にも拘らず隷下部隊に自衛戦闘を命じ、日本を分断国家の危機から救った作戦指導には、ユダヤ人難民の救出、アリューシャン群島の作戦を通じて一貫したものがあるように感じる。

以下各正面の戦いについて紹介する。

（１）千島列島正面の戦い

この正面においては、ソ軍は占守島に８月17～18日夜突如上陸してきたが、

樋口軍司令官は自衛のための戦闘を命じて、ソ軍に壊滅的打撃を与え、道東侵攻の野望を阻止したことは、「慰霊」41・42号で紹介したとおりである。

（２）樺太正面の戦い

樺太正面の戦いについてはこれまで紹介していないので、ここで戦闘経過について紹介したい。

南樺太地区の防衛を命じられていた第88師団長は、対米戦を重視して、南部に師団主力を配置、北部国境正面には歩兵第１２５連隊のみを配置していた。

国境線北部のソ軍は、８月９日の対日参戦日から偵察活動を活発化させ、11日朝１個狙撃師団をもって古屯正面から南進を開始し、歩兵第１２５連隊の陣地に対し攻撃を開始した。

また、この攻撃に連携して12日に一部の部隊が西海岸の安別に、16日には更に南方の恵須取に上陸させた。

国境から南下したソ軍主力は、16日まで主陣地への攻撃を反復するが、第１２５連隊の頑強な抵抗により陣地を突破することはできなかった。

しかしながら、17日朝に至り、連隊は師団から戦闘行動停止の命令を受領、連隊長はその日の午後、ソ軍に軍使を派遣して局地停戦交渉に入った。

交渉は難航したが、22日に至りやっと交渉が成立、23日に武装を解除した。

西海岸に配置されたわが部隊も停戦命令に従い防御戦闘を継続しつつ交渉に入ったが、18日には交渉が決裂したため、陣地を徹し、内路に後退した。

部隊は、24日に内路付近において師団から武装解除命令を受領したため、武器を手入れした後、道路の一側に整頓し、恵須取から前進してきたソ軍に武器を引き渡している。

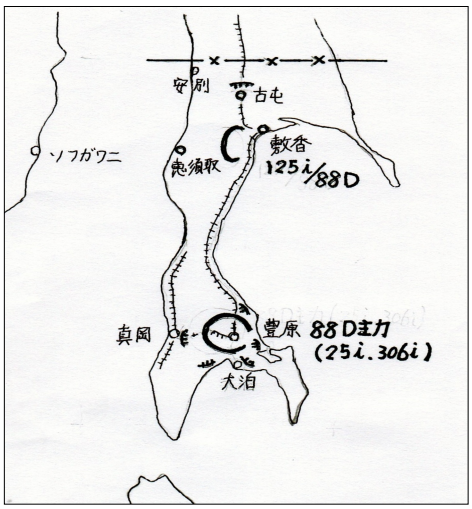
南方の真岡正面には、8月20日朝、ソ軍は、艦砲射撃の後上陸を開始した。

この地域の防衛に任じていた歩兵第25連隊長は、上陸したソ軍に停戦交渉のため軍使を派遣したが、軍使が射殺され、更にソ軍が避難する住民に対しても機関銃を猛射し殺戮した。

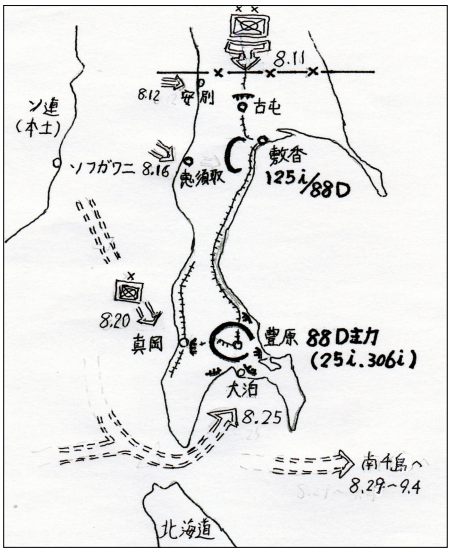
これを見た我が連隊の部隊は、前面のソ軍部隊に猛反撃を開始し本格的戦闘に突入した。

上陸したソ軍部隊は、21日には真岡東側陣地を突破し、22日には連隊主力が陣地占領していた逢坂西側陣地を攻撃したが、我が部隊に阻止された。

この日夕、連隊は「俘虜になるとも停戦すべし」との師団命令を受け、改めて停戦交渉に臨み、23日には停戦交渉が成立し武装を解除した。



南樺太地区の防御配備



ソ軍の樺太侵攻

８月28日には樺太全部隊の武装解除を終了、部隊は作業大隊に編成され、逐次ソ連領土に移された。

四　おわりに

戦後、ソ連は樋口将軍を戦犯に指名し、連合軍総司令部に引き渡しを要求してきたが、マッカーサー総司令官は、樋口将軍は人道主義者であると擁護し引き渡しを拒否しました。この回答の背後にはユダヤ人の強い働きかけがあったものと思われます。

以上、オトボール事件でのユダヤ人難民の救出、アリューシャン群島作戦におけるキスカ守備隊の奇跡の撤退、終戦後の千島・樺太両正面おける自衛戦闘で「日本を分断国家の悲劇から救った」ことについて紹介しましたが、樋口将軍が人道主義と広い視野に立って正しい決断をし、断固として行動した素晴らしい将軍であったことがお分かりいただけたことと思います。

（圓藤春喜記）

事務局からの報告等

一　平成29年度第2回通常理事会の開催

3月7日（水）、平成29年度第2回通常理事会が当協議会会議室に於いて開催された。

会議においては、事務局からの提出議題について熱心な討議が行われ、いずれも事務局案が、原案どおり承認された。

（一）議案

①平成30年度事業計画書及び同収支予算書

②財産運用の執行方針及び計画

③平成29年度下半期職務　執行状況

（二）出席者

理事9名中8名及び監事2名が出席した。

二　慰霊祭等への参加状況

○硫黄島帰還遺骨引き渡し式

2月15日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、硫黄島戦没者遺骨帰還団遺骨引渡式が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

○ＪＹＭＡ日本青年遺骨収集団慰霊祭

3月3日、靖國神社においてＮＰＯ法人ＪＹＭＡ日本青年遺骨収集団主催による戦没者慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

○特攻隊全戦没者慰霊祭

3月31日、靖國神社において（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会主催による第39回特攻隊全戦没者慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

三　硫黄島遺骨収集事業への参画

平成29年度硫黄島戦没者遺骨収集第4回派遣が1月31日から2月15日まで実施され、当協議会からの派遣団員として、（公財）偕行社から2名、（公財）水交会及びつばさ会から各1名が参加しご遺骨の収集に献身されました。

収容作業は、高温多湿、狭い洞窟内で行われ体力の消耗が著しく、大変御苦労されました。お疲れ様でした。

今年度収容された17柱の御遺骨は、2月15日に厚労省に引き渡されました。

四　海外戦没者遺骨収集への参画

平成29年度ミャンマー戦没者遺骨収集が3月7日から22日の間実施され、当協議会からの派遣団員として、全ビルマ会から2名が参加し遺骨の収集に献身されました。

五　新入会員（敬称略）

（平成29年12月1日～平成30年2月28日）

【賛助会員】（五十音順）

石垣　貴千代　佐藤　武士　神野　義孝
鈴木　邦彦　武藤　孝行　渡邊　秀光

ご寄稿のお願い

当協議会は、広報誌「慰霊」を、年3回（1月、4月、9月）に発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的なご寄稿をお願い申し上げます。原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。関連の写真等がありましたら努めて添付をお願いします。

会費納入のお願い

平成30年度の年会費納入にご協力をお願い申し上げます。

なお、本誌同封払込取扱票は、賛助会員年会費納入並びに平成30年度合同慰霊祭参加申込及び参加費納入を兼ねております。ご確認の上、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会は、民間有志の会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う多くの皆様の、当協議会会員ご加入を心からお待ち申し上げます。

既加入会員の皆様には、お知り合いの方の新規入会勧誘に、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は次の通りです。

一　賛助会員
（本会の趣旨に賛同する個人）
年会費　三〇〇〇円

二　賛助特別会員
（特別御芳志の賛助会員）
年会費　五〇〇〇〇円

三　正会員
（本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体）
年会費　一〇〇〇〇円

四　特別会員
（本会の趣旨に賛同する法人・団体）
年会費（一口）一〇〇〇〇円
（一口以上）

協議会参加各団体の平成30年度慰霊行事予定（情報入手分のみ）

（各団体が主催する慰霊行事を主とし、協賛事業は割愛しています。）

年月日	時間	慰霊行事名	場所
（公財）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会			
30・7・7	式典12時～ 直会13時30分～	平成30年度大東亜戦争 全戦没者合同慰霊祭	靖國神社 靖國会館
（公財）海原会			
30・5・20	10時30分～	第51回予科練戦没者慰霊祭	陸自土浦駐屯地内
英霊にこたえる会			
30・4・7	14時45分～16時	第34回靖國神社の桜の花の下で「同期の桜」を歌う会	靖國神社大村 並次郎像前
30・8・15	9時～10時 10時30分～12時15分	第43回全国戦没者慰霊大祭 第32回戦没者追悼中央国民集会	靖國神社拝殿 靖國神社境内
鹿児島偕行会			
30・6・18	9時30分～11時30分	鹿児島沖縄戦没者慰霊祭	鹿児島県護国神社
30・8・15	10時～11時	大東亜戦争戦没者慰霊祭	鹿児島県護国神社
31・3・26	10時30分～11時30分	鹿児島戦没者墓地慰霊祭	鹿児島戦没者墓地
旧戦友連			
30・4・7	14時45分～16時	第34回靖國神社の桜の花の下で「同期の桜」を歌う会	靖國神社大村 並次郎像前
通年（日曜日・祭日）	10時～15時	靖國神社社頭広報	靖國神社参集殿前
群馬偕行会			
30・8・15		群馬県戦没者追悼式　ＡＬＳＯＫぐんまアリーナ	
30・8・24		みたま祭	群馬縣護国神社
熊本県偕行会			
30・11・1	11時～15時	合同慰霊祭	熊本縣護国神社
特定非営利活動法人国民保護協力会			
31・2・23		山下奉文大将慰霊祭	青葉園
特定非営利活動法人ＪＹＭＡ日本青年遺骨収集団			
31・3月	10時～15時	ＪＹＭＡ慰霊祭・活動報告会	靖國神社
全国ソロモン会			
30・10・21	11時～12時	ソロモン群島方面戦没者慰霊祭	靖國神社

年月日	時間	慰霊行事名	場所
全国メレヨン会			
30・4・7	11時～15時	第49回全国メレヨン島戦没者追悼慰霊祭	備後護国神社慰霊碑前
30・6・3	11時～13時	メレヨン島北海道出身戦没者追悼慰霊祭	札幌護国神社慰霊碑前
全ビルマ会			
30・10・28	11時～14時	東京メレヨン会慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
30・11・3	10時～14時	全ビルマ方面戦没者慰霊祭	靖國神社
ソ聯抑留戦友会・東京ヤゴダ会			
30・11・3	12時～13時30分	第22回ソ聯抑留中死没者鎮魂慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
筑後地区偕行会			
30・8・15	10時～12時	戦没者慰霊平和祈年祭	久留米市忠霊塔
31・2・22	10時～12時	爆弾三勇士慰霊祭	山川招魂社
（公財）千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会			
30・5月	12時30分～13時15分	千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式	千鳥ヶ淵戦没者墓苑 千鳥ヶ淵戦没者墓苑
東部ニューギニア戦友遺族会			
30・10・18	12時30分～14時30分	秋季慰霊祭	
30・4・5	10時～15時	靖国神社永代神楽祭奉斎（年次総会）	靖國神社
（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会			
30・9・23	14時～16時30分	第67回特攻平和観音年次法要	世田谷山観音寺
31・3月	11時～14時30分	第40回特攻隊全戦没者慰霊祭	靖國神社
ハワイ明治会			
30・8・31		盆法要	ハワイマキキ日本海軍墓地
30・3・20		招魂慰霊祭	ハワイマキキ日本海軍墓地
福岡県偕行会			
30・5・4	15時～16時30分	福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭	福岡縣護国神社
30・10月	11時～	福岡陸軍墓地慰霊祭	福岡陸軍墓地
姫路偕行会			
30・8・10	10時～12時	戦没者追悼慰霊祭 田中静壱陸軍大将顕彰碑慰霊祭	名古山霊園陸軍墓地 たつの市龍野公園
宮崎県偕行会			
30・5月～6月		宮崎県出身戦没者慰霊祭	宮崎縣護國神社
山口県偕行会			
30・11・11	14時～16時	山口県陸軍墓地慰霊祭	山口県陸軍墓地